

## 2)アユの冷水病、シュードモナス病の発生状況

山本充孝・二宮浩司

【目的】両疾病に対する疫学調査を実施し、発生条件の検討を行い、養殖場での被害軽減のための基礎資料を得る。

### 【成果概要】

平成11年度(4月～3月)の魚病診断カルテ(アユ64件)を池毎に取りまとめた。

1. 発生状況:冷水病は、ほぼ周年発生した。シュードモナス病は昨年度と比べ12月以降の発生が減少した。
2. 症状
  - ①冷水病:鰓・内臓の貧血が主な症状であり、体側や尾柄部に潰瘍を示すものも多かった。その他、特に稚魚期の魚は下顎に出血や潰瘍症状を示すものも多かった。
  - ②シュードモナス病:主な症状は出血性の腹水貯溜と鰓の軽い貧血であり、その他、脂肪組織に点状出血や肛門の拡張・発赤を示すものも多かった。
3. 日間死亡率:冷水病は0.1%～13.3%、シュードモナス病は0.3%～3.7%の範囲で、ともにばらつきが大きかった(図1)。
4. 池入れ後から発病までの日数(図2)
  - ①冷水病:収容直後の発病の他、特に時期に関係なく発病した。また、90日以上経ってから発病することもあった。但し、これはその池における2回目以降の発生と思われる。
  - ②シュードモナス病:多くは30日目以降に発生した。また、池入れ後90日以上経ってからの発病も見られた。
5. 飼育池の水温(図3)
  - ①冷水病:大半は22℃以下の水温で発生していた。20℃以上での発病も見られるが、この場合最低水温は20℃以下であると思われる。
  - ②シュードモナス病:水温との関連は特に見られなかった。
6. 放養密度(図4)
  - ①冷水病:密度との関連は見られなかった。
  - ②シュードモナス病:放養密度が高い場合に発生が多く見られた。
7. 薬剤感受性
  - ①冷水病原因菌:スルフィソゾール、フロルフェニコール等に高い感受性を示した。
  - ②シュードモナス病原因菌:感受性を示す薬剤はほとんどなかった。

### 【成果の活用】

冷水病の場合、加温処理や投薬により被害を抑えてきた。一方、シュードモナス病の場合は治療効果のある薬剤がなく、予防に重点を置かざるを得なかった。

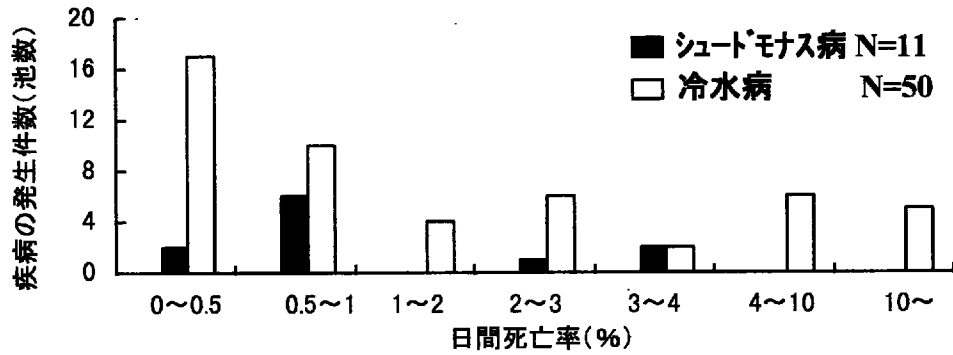


図1. 冷水病、シュートモナス病の日間死亡率別発生状況

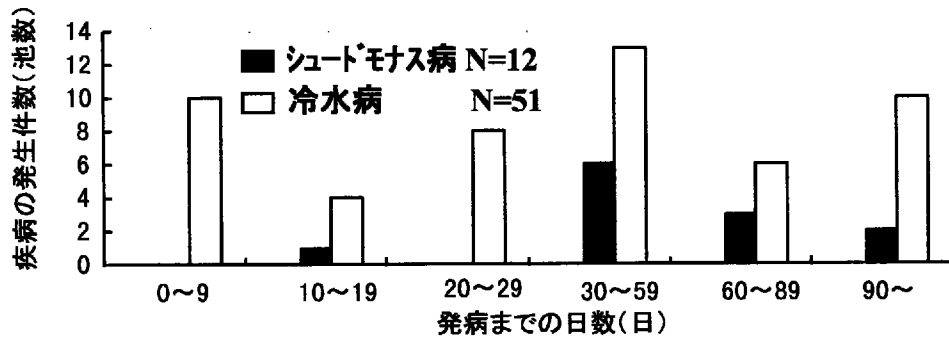


図2. 冷水病、シュートモナス病の発病までの日数別発生状況

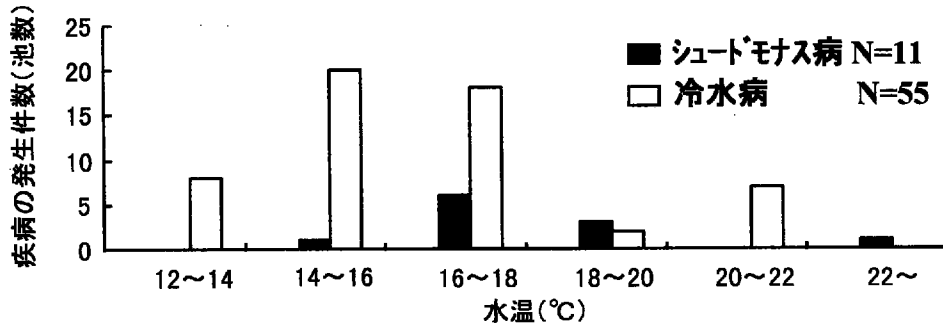


図3. 冷水病、シュートモナス病の飼育水温別発生状況

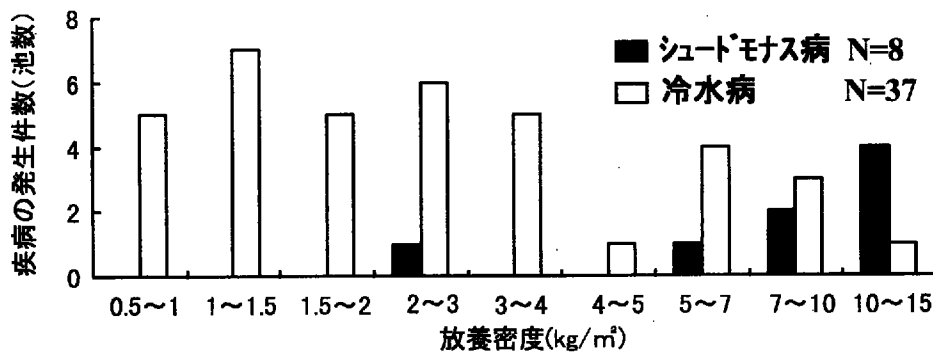


図4. 冷水病、シュートモナス病の放養密度別発生状況